「一般社団法人（非営利）いぶき宿（じゅく）」通信 2019 No. 33① 2019. 9

「いぶき宿」
http:// ibukijuku.org
野上幸恵

第一部

南の方での豪雨災害に心を痛めながら、今年は自然が本当に号涙しているかのごとく止むことのない水害に失われた日常を心に留めながら、横浜教区の５つの教会の信徒 20 人で福島への旅にでました。

９月２日から４日までの２泊３日の巡礼の旅でした。核事故によって失われたおだやかな日常、の悲嘆のなかにも、土とともにいのちとともに、日常を復活されようとしておられる人々に出会う旅でした。バスの乗車とともに祈りに始まり、バスから降りる前の祈りに終わる、本当に巡礼でした。

「放浪は目的なくさまよい歩くこと。巡礼は目的を持って踏みしめて歩むこと」との小笠原神父様の言葉を今も噛みしめています。

常磐道

常磐道を北に向って走りながら、景色の移り変わりがそこで生活している人々の日常をも変えるのだと感じました。

常磐道で、今までとは異なった情景に身を置くことになりました。ペースカーとかいた幕をトラックの運転台の後ろに貼付けて走っているフレコンバック運搬トラックの列。震災の年の夏の光景が重なりました。あの時はフレコンバックのトラックではなく、自衛隊のトラックの行列。パーキングエリアで一緒になった隊員に話しかけていろいろ聞いたことが昨日のように思い出されました。これらのトラックの間に挟まれての走行に複雑な思いを持ちました。いわきナンバーでしたが、いわきより南から走ってきました。北関東からなのでしょうか？どこから来てどこへ？

きっちりと制限時速を守っての運転。事故をおこされると新たな惨事です！

飯館村

飯館村に入り、「までい館」の前で長谷川花子さんにご同乗いただき、まずは昼食。原発立地の南相馬市に合併することなく、美しい自然と「までい」な生活を営む理想をかかげて、まさしく理想的な村づくりがなされていた村です。

避難解除とともに帰村が勧められ、村をこよなく愛する人、ともに生きて来た土を愛でている人々が村に戻り復活を夢みておられましたが、現実はそれはそれは厳しいものでした。真っ暗闇のトンネルの中で、希望を繋ぐことは至難の業であると痛感しました。そんな中で、土のいのちを保つために蕎麦づくりをはじめられ、「までい」に準備された手打ち蕎麦、昼食の一品一品が、暖かいいのちを届けてくれるようでした。

本当に美味しかったです。体調を崩されている店主さんが酸素ボンベを背負いながら、準備くださった食事のありがたさが身に沁みました。

【「までい」とは「手間ひまを惜しまず」「心をこめて」「丁寧に」「慎ましく」という「スローライフ」のこと】

飯館村は全戸の 1/3 が旧満州などからの引き上げで、県内でも気温が数度も低い寒冷の地で、木を切り、土地を耕し、半世紀かけて「日本一美しい村」としての麗しい里を作り上げた場所です。引き上げ者は阿武隈山系の飯館にしか土地を見つけられなかったのです。人口流出、子供も少なかったので、エンジェルプランや男性の育児休暇などもいち早く取り組んでいた村です。そして、「若妻の翼」は村の補助金４０万円に自己負担１０万円でヨーロッパ研修旅行に送り出したのです。添乗員もつけずに。自分たちで判断しながら周り、自主性や積極性を養う研修旅行でした。一人の自立した人間として生きていくためでした。

もう一度村を開拓し直す。戦後と同じ。20 年 30 年後に帰って来た孫、ひ孫たちに、じいちゃん、ばあちゃんは日本一の村を復活させたと次世代に美しい村を手渡したい人々は、絶望から立ち上がる強さ

を持っておられます。その絶望の中に希望の光を見ているのです。「希望」は「自分のため」でなく「次世代のため」未来を見つめている中からうまれているようです。
花子さんもこの「若妻の翼」で研修旅行に行った一人です。

バスで村を廻りながら、長谷川花子さんから飯館村の現状をきく

原発立地地区が合併して南相馬市になる時に飯館村は原発に頼らない村づくりを目指し村のまま存続しました。原発交付金とは全く無縁だったこの小さな村が、長い時間をかけて知恵を絞り、障壁を乗り越え育てて来た「までいライフ」がたった一度の核事故（原発事故）で全てが水泡に帰したのです。事故による放射能被害がよりによって飯館村を襲い、被災への補償金が・・・それがどのように使われていくかということが・・・

「までい館」の前に設置された彫像。同じ作家の作品がいろいろな所に設置されているとか・・・

本当に原発事故が壊したのは、人々が長年耕し、培って来た「日常」なのだということをいたい程痛感しました。

小高同慶寺

飯舘村から、小高の同慶寺に行きました。同慶寺は相馬藩の菩提寺として田中徳雲さんが住職として守っておられます。菩提寺なので、歴代の相馬の藩主が休んでおられるお墓が並んでいます。

田中ご住職のお話は何度聞いても心を打たれます。原発について学び、知識を持っておられたご住職は、あの大地震のあとの津波で停電になり、原発で電源喪失すればメルトダウンは避けられないと、いち早く避難を決断されました。逃げるように周りの人を誘っても、素直に逃げてくれる人はいなかったと。車に乗れる人数から、ご母堂を一人置いていかざるを得ない厳しい現実にどれほど心を痛められたことでしょうか。福井に避難され、ご住職だけが小高に戻られ、家族が離ればなれの生活。ご住職の福井と小高の往復の生活、父親のいない家族のストレスなど、限界を迎え、実家のあるいわきへ再避難されました。その時の子どもたちの抵抗を親の権威で車に乗せたことを今でも考えられるそうです。再度の引越に素足で逃げて木々の茂みにうずくまって泣きながら抵抗する子供を、謝りながら引きずり抱えて車に乗せて走ったことは、ご住職の脳裏に鮮明に蘇っているようでした。各地に散らばって避難された檀家さんたちのケアのために走り回れた距離は半端ではありません。地球７回半程にもなるとか。生きる望みを失う程の苦しみと悩みの中にある檀家さんたちに寄り添うために、まさに身を削って仕えておられる姿が神々しかったです。

お寺さんのご本堂は落ち着きます。今度は、「ここで泊まっても」とは神父さんの言葉。「どうぞどうぞ」とご住職。

お話を伺う回を重ねる毎にご住職のこの未曾有の災害に対してのお考えが深まり、神さま（仏さま）が私たちに与えてくださっている貴重なチャンスとして、この災害を捉えられ、自らの生活を変えるようにとの呼びかけに真摯に、具体的に向き合っておられる姿が滲み出ていました。お子さんたちは現代社会の子どもたちなので、父親のご住職の生き方、生活のありかたをまだまだ理解できない所があるのは否めない現実です。が、父の背中を見て育つ子供が大人になったとき、きっと「ア、そうだったんだ！」と分ってくれることを信じておられる信頼も伝わってきました。具体的な日常生活が自然との共存、自然の恵みを大切に生きられる徹底さに背筋が伸びました。東京ではできないかもしれないのですが、車も廃油とガソリンの併用で走っておられます。

第一日目を終え、今日は原ノ町駅前のホテルに宿泊。原ノ町駅は、相馬野馬追とマッチした駅舎。（続く）